

4. 呪術・魔術・魔法、マジック、マジア

◆日本語の問題

「呪い」

- ・まじない（自然にたいし働きかける。e.g. 豊作祈願や降雨儀礼）
- ・のろい（人や物に危害を与える。e.g. 「黒魔術（black magic）」
・「妖術（witchcraft）」・「邪術（sorcery）」

近代日本における翻訳

①西洋のものを日本語に取り込む

- ・【 】
- ・【 】

②日本のものを西洋語や西洋の概念で説明する

○magic そしてその関連語の訳語は、基本的に「魔法」

「魔法」の語は既に室町中期の節用集の刊本の一つ文明本（1474 年）に現れている

（『日本国語大辞典』第2版、第12巻、小学館、2001年、500頁）。

キリシタン版の『日葡辞書』（1603-1604年）にも“Mafō”という項目の下に

「Tengunonori（天狗の法） 悪魔の教法」という意味解説が付されている（土井忠生ほか編訳『邦訳日葡辞書』、岩波書店、1980年、378頁）。

- ・ witchcraft（現在では「妖術」）や sorcery（同「邪術」）といった語の訳語も「【 】」

☆" magic "は【 】から訳語を選ぶことができた
" religion "は【 】訳語を作らなければならなかった

では「呪術」は？

遅くとも漢訳の『観無量寿経』に現れ、日本では『続日本紀』（巻第3、文武3年（699年）5月丁丑の条）において役小角の実践を表す語として言及されている。

☆しかしながら「呪術」は、「魔法」と比べると、近世・近代において独立した概念として人口に膾炙していたと断言することは難しい。

一方で、「飯縄」が定着する可能性もあった。

→明治初期～昭和初期、magic に対応する語とみなされていた（と思われる）「魔法」

以後、宗教学・人類学・民俗学では【 】
歴史学（特に西洋史）では【 】

一方で、1960年代以降、「魔法」そして「魔術」、果ては「魔道」、「魔界」等が、とりわけサブカルチャーの領域で再顕在化

加えて現在、コミック、アニメ、ゲームを通じて"Mahou"の語が「輸出」されている

用語の整理（上段は実践の名、下段は実践者）

ギリシア語	ギリシア語	ラテン語	英語
マゲイア	ゴエーティア	マギア	マジック
マゴス	ゴエース	マグス	マジシャン

○ヘレニズムにおけるマジア

933:E「^{のろ}詛い、^{まな}呪文、呪い、あるいは、それに類したやり方の何によってであれ、害をあたえているとの嫌疑をかけられた者の場合は、もし彼が予言者や占い師であるなら、死刑にされるべきである。」プラトン「法律」(森進一・池田美恵・加来彰俊訳)、『プラトン全集 13』、岩波書店、1976 年、703 頁

参照軸は【 】

→当初から「排除されるべきもの」というニュアンスが込められていた

○ヘブライズムにおけるマジア

マジア (magia) = 迷信 (superstitio) = 悪魔の仕業という図式 (マジアを実践するのがマガス[magus])

17C のプロテスタンティズムにおけるマジア観

マジア：儀礼主義に基づくもの、またオカルト的な力を誤って用いる一連の技法

宗教：至高の神の摂理の内にある信仰体系

→参照軸は

☆プロテスタンティズムとカトリシズム

'Surely, if a man will but take a view of all Popery, he shall easily see that a great part of it is mere magic.', William Perkins, *A Golden Chaine, or the description of theologie* [1591]

Keith Thomas, *Religion and the decline of magic*, Penguin, 1973(1971)

キース・ヴィヴィアン・トマス『宗教と魔術の衰退』(上・下)(荒木正純訳)、法政大学出版会、1993 年

「マジアと宗教を区別する線というものは、多くの原始・未開社会において引くことができない。同様に、中世イングランドにおいても確定が困難である。」 Thomas, p.57

「マジアと宗教の区別を曖昧なものにしてきたのが中世教会だったとするなら、その区分を再び明確にしたのは、プロテスタントの宗教改革の宣伝者たちであった。」 Thomas, p.58

・ロラード派の主張 (1395 年)

Twelve Conclusions 「酒、パン、ロウソク、水、塩、そして油、さらに香、祭壇の石、こうしたものに対する、祭服、司祭冠、十字架、そして巡礼の杖に誓って行われる教会の悪魔祓いと清めとは、聖なる神学の礼拝式というよりむしろ黒魔術そのものであること。」 トマス邦訳 70 頁

不幸や苦難の回避の方法の伝授、不幸や苦難の原因の説明

この側面からみると、宗教もマジアも同じ。ではどこに違いがあるのか？

「イングランドにおける民間のマジアは、限られた数の機能を果たしていたにすぎなかった。それは妖術 (witchcraft) からの防御、そして、病気、盗難、不幸な対人関係の治療法となっていたのである。しかし包括的な世界観が打ち出されることは決してなく、人間の実存を説明したり、将来の生活を約束したりすることはなかった。それは種々雑多な処方箋 (recipes) の寄せ集めであり、包括的な教義の体系ではなかったのである。キリスト教徒たちの信仰は、生活のあらゆる側面に適用可能な指導原理であったが、他方マジアは、多様な個別的諸問題を克服する方法にすぎなかった。」 Thomas, pp.761-762

「いかなるものであれマジアの臭いのするものは嫌悪するというこの態度は、プロテスタントの祈りにたいする姿勢を支配していた。」 Thomas, p.69

↓

「地上の出来事は超自然的存在の介入に左右されうるとする信仰は、それ自体、マジック的なものではなかった。聖職者の祈り（*prayers*）とマジックの呪文（*spells*）の本質的な違いは、呪文だけが自動的なはたらきを主張する点にある。祈りが確実に成功する保証はなく、神が承認しなければそれが聞き届けられることはない。一方、呪文は失敗することがない。ただし、儀礼の詳細が省略されておらず、対抗するマジックがよりいっそう強力な対抗マジックを行っていない場合は、という条件付きであった。換言すると、祈りは嘆願（*supplication*）のひとつの形式であり、呪文は自動的に働く操作手段（*a mechanical means of manipulation*）であった。自然には隠された力（*occult forces*）があり、マジックはその力の統御法を学ぶことができると、マジックは仮定していた。一方で宗教が仮定していたのは、意図を持った行為者（*a conscious agent*）が世界を方向付けること、さらに、行為者の意図を変えることができるのは、祈りと嘆願以外にないことであった。」 Thomas, p.46

キース・トマスによるマジックの定義

「もしマジックを、効果的な技術がないとき不安を和らげるために実効のない技術を用いることと定義するならば、マジックから逃れることのできる社会などないことを認めなくてはならない。」 Thomas, p.800

○ヒューマニズムにおけるマジック

19C～民族学、宗教学

→参照軸は

・J・G・フレイザー（James George Frazer, 1854-1941）『金枝篇（*The Golden Bough*）』

初版	1890 年	全 2 巻	ちくま学芸文庫 吉川信 訳
第二版	1900 年	全 3 巻	（翻訳なし）
第三版	1911-15 年	全 11 巻+書誌+補遺	国書刊行会 神成利男 訳
縮約版	1922 年	-	岩波文庫 永橋卓介 訳
ギャスター版	1959 年		（なし）
マコーマック版	1978 年	-	講談社学術文庫 吉岡晶子 訳

フレイザーの宗教／マジック理解

「宗教という言葉で私が理解するのは、自然や人間の生活の流れを指示し支配すると信じられている人知を超えた力への慰撫もしくは宥和（*a propitiation or conciliation*）である。」

Second edition, p. 63.

マジックは「宗教のように宥和や慰撫を行うのではなく、強要し威圧（*constrains or coerces*）するのである。」 Second edition, p. 64.

「マジックとは非合理的な行動指針であると同時に、自然法則の偽りの体系である。發育不全の技術であると同時に誤った科学なのである。」 third edition, I, p.53

・マジアの原理

「感応マジア (sympathetic magic) の原理の一つは、いかなる効果もそれを真似ることによって生み出されるというものである。いくつか例を挙げよう。ある人を殺したいと思うとき、その人の像を作りそれを破壊する。つまり、人とその像のあいだの物理的な感応によって、像に加えられた危害はまるで身体自身に加えられたもののように感じられ、像が破壊されると同時にその人も死ぬに違いないと信じられたのである。」 first edition, I, p.9

「また、マジア的な感応は、人と、髪の毛や爪のように人から切り離されたものとのあいだに存在すると考えられている。だから、髪の毛や爪を手に入れた者は誰でも、どれだけ離れていても、それらが切り離された当の人に対し自らの意志をはたらかせることができる。」

first edition, I, p.10

↓

「マジアの基礎を成している思考原理を分析するなら、おそらく次の二つに分けられるであろう。一点目は、似ているものは似ているものを生み出す、あるいは、結果は原因に似る。二点目は、かつて互いに接触していたものは、物理的接触が終わり離れたあとでも、互いに影響を及ぼす。前者の原理を《類似の法則 (Law of Similarity)》、後者を《接触または感染の法則 (Law of Contact or Contagion)》と呼んでよい。第一の原理、すなわち《類似の法則》に基づきマジスは、ただ真似ることによって自分が望む結果を生み出すことができると考える。そして第二の原理により、物体にたいして行った行為は、その物体が相手の身体の一部であったかどうかにかかわらず、かつて接触していた身体に同じ影響を及ぼすと考え。《類似の法則》に基づく呪力を《類感マジアまたは模倣マジア (Homoeopathic or Imitative Magic)》、《接触または感染の法則 (Law of Contact or Contagion)》に基づく呪力を《感染マジア (Contagious Magic)》と呼んでも良い。」 third edition, I, pp.52-53

感応マジアの二つの原理

「模倣マジア」	【 】の法則に基づく	写真や人形を用いる
「感染マジア」	【 】の法則に基づく	髪の毛や爪を用いる

「こうした普遍的信念、すなわちまさにカトリックな信条 (creed) とは、マジアの効果への信念である。宗教体系はそれぞれの国においてだけでなく、同じ国でも時代によって異なる。一方、感応マジアの体系はどこでもいつの時代でも、その原理と実践に関し本質的に同じである。」 third edition, I, pp.235-236

→☆マジアは「普遍的 (カトリック)」

・ アンジェロ・ブレリチ (Angelo Brelich, 1913-1977)

1976 年の論考「(マギア概念をめぐる) 三つのノート」

Angelo Brelich, "Tre note (sul concetto di magia)", in: Mitologia, Politeismo, Magia e altri studi di storia delle religioni (1956-1977), Napoli : Liguori, 2002, pp.129-138.

● 「マギア」と「宗教」の対照 (p.130)

「マギア」: 非人格的な力を支配すること／「宗教」: 超人間的で人格的な力に従属すること

「マギア」: 非社会的・反社会的態度／「宗教」: 聖と向かい合ったときの共同体の態度

「マギア」: 「宗教」が墮落したもの

「宗教」: 目的を欠いた創造的表現／「マギア」: 「宗教」の功利的適用

☆ 共通するのは、「宗教」を【 】として「マギア」が利用されてきた点 (p.130)

○ブレリチの理解

完全に「世俗的な (laico)」観点からみれば、「宗教」と「マギア」のあいだには、いかなる種類の対照も正当化されない。

・ マギアも実は信仰を前提としている。

・ マギアも超人間的で人格的な実体への信仰に関わる場合がある。

「マギア」は「直接的」で「物質的」(エゴイスティックな態度が支配的)

「宗教」はより「崇高」で「精神的」(私欲のない態度が支配的)

このような「純粋な切断」はあり得ない (p.131)

「宗教」は集合的関心に基づくものだが、「マギア」は個人的関心に基づくとする差異化についても

→自分自身の治癒のために教会で祈ることもあり得るし、雨乞いは共同体への奉仕に他ならない (p.131)。

☆ 「宗教」と「マギア」を対比的に捉えることはもはや有効ではない (pp.131-132)

→magico-religious